

新紀尾井素踊りの会

第四回

西川箕乃助

にしかわみ のすけ

すっかり紀尾井ホールの代表的なシリーズ公演となった「新紀尾井素踊りの会」。第4回は西川箕乃助さんのご登場です。日本舞踊の魅力についてお話しいただきます。

——西川流の踊りの特徴とはどのようなものでしょうか。

歌舞伎の「所作事(歌舞伎舞踊)」を原点として、日本舞踊の流派の中では最も古いとされています。西川流は「基本に忠実」にして「古風」、そして「おおらか」です。音の間合いが大きく、他の流派と比較して振りの数も少ないですね。父(現家元・十代目西川扇藏)からは常々「『うまい踊り』より『いい踊り』をめざしなさい



い」といわれています。

——箕乃助さんが思う「素踊り」の魅力とは

素踊りの「素」とは「特別な扮装を纏わない」という意味です。男性の場合、「衣裳付」の踊りと違い紋付と袴だけで踊ります。素踊りの真骨頂は、あたくも衣裳を身に着けて踊っているようにお客様に感じていただくことです。だからこそ実際に衣裳を着けて踊り、感覚を体に蓄えておくことが重要で、「衣裳付」で踊っていないければ「素踊り」は踊れないと思います。

——今回ご披露される演目について、箕乃助さんご自身の目線から見た、特徴や面白さなどをお聞かせください。

『玉屋』は江戸時代のシャボン玉売りの姿を描いたものです。通常は衣裳付で踊られることが多いこの踊りを今回は素踊りでご覧いただきます。まるでここにシャボン玉が浮かんでいるような情景をご覧に入りたいですね。

次にお見せする『ちよんがれ一休』は「一休さん」こと二休禅師の洒落た生き様を描いたもので、普段あまり西川流では使われない地歌にのせて、素踊りでは珍しく着流しを纏って踊ります。花柳茂香先生(日本舞踊家・故人)が私のために振りをつけてく



「ちよんがれ一休」

れたもので、軽妙洒落な踊りを作ってくださいました。私にとって大切な作品です。斜に構えて軽妙洒落に生きた一休の姿の面白さを感じていただければと思います。

——これまでも日本舞踊家としてさまざまな分野で活動されていますが、日本舞踊の持つ「力」や「可能性」をどのように見ておられますか。

これまでも洋楽で踊ってみたり、洋装で踊ってみたり色々な試みをしています。日本の伝統文化を大切に尊重した上で成り立っているものでないと、どんどん違うものに変容してしまいますね。どういう風に日本古来の文化を若い人たちにわかってもらえるかを日々考えています。その取り組みの一つとして、大河ドラマをはじめとする時代劇の所作指導などにも関わり、理にかなった素晴らしさを伝えています。

——今回の公演で初めて日本舞踊をご覧になる方もいるかと思いますが、日本舞踊の魅力とは何でしょうか。

踊りというのは肉体表現と地方(演奏)のマッチングなわけです。ですから、メロディーなどが身体の動きとどう風をリンクしているかなど、そのあたりを総体的に感じていただければ嬉しいと思います。

〈お話を聞き終えて〉

若いころは素踊りを踊っても「形にならない」という思いを持っていた箕乃助さん。しかし年を重ねることで「素踊りの居心地」というのか、『あ、こういう感じがいいのか』と感じる「境地にたどり着いている」そうです。

積み重ねた稽古で磨き抜かれた珠玉のそして円熟の踊りを、ご自身が「コンパクトな”和”の空間」と評する初夏の紀尾井小ホールで、ぜひご堪能ください。

聞き手：執筆／ムトウタロー
(文芸コラムニスト)

新紀尾井素踊りの会 第四回 西川箕乃助

【出演者】

立 方：西川箕乃助
浄 瑠 璃：清元清榮太夫、清元清美太夫、清元成美太夫
三 味 線：清元栄吉、清元美十郎
上 調 子：清元美一郎
囃 子：堅田新十郎社中
唄・三 絃：富山清琴
お 話：渡辺保

【演目】

清元「玉屋」
素踊りの魅力(お話)
地歌「ちよんがれ一休」
素踊りを語る(お話)

6/17
土
14:00

※公演開催についての最新情報は紀尾井ホールウェブサイトをご確認ください。